ホームルーム活動で行う情報モラル教育
ー携帯電話に関する短時間活用教材ー

長期研究員　渡　辺　義　和

Ⅰ　研究の趣旨

平成20年２月に福島県教育センターが実施した「携帯電話・インターネットに関する調査」結果から，高等学校第１学年の携帯電話所持率は97.4%で，メールの送受信回数や利用時間が多いことが明らかとなった。また，平成20年４月に福島県教育センターが実施した「福島県の情報教育の実態に関する調査」結果によると電子掲示板，ブログ・プロフ，電子メールの問題が数多く発生している。

これらのことから，携帯電話に関する情報モラル教育を早急に行う必要があると考えた。

そこで，短時間で取り組める教材（以下短時間活用教材と呼ぶ）を作成し，朝や帰りのホームルーム活動の時間を活用することで，携帯電話に関する情報モラル教育ができると考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究の概要

1　研究仮説

生徒が携帯電話にかかわる事故の被害者や加害者とならないように，朝や帰りのホームルーム活動という限られた時間でも，短時間活用教材の利用によって情報モラルの知識を身に付けることにより，携帯電話の適正な利用や迷惑メールの対処ができるようになるであろう。また，ホームルーム活動の中でコミュニケーション能力を向上させる取組みを行うことにより，文字だけのコミュニケーションによるトラブルへの発展を防止し，電子メールや電子掲示板に関わるトラブルを未然に防ぐことができるであろう。

2　研究内容

(1)　研究対象

研究協力校Ａ校　高等学校第１学年　生徒41名
研究協力校Ｂ校　高等学校第１学年　生徒40名

①　高等学校第1学年とした理由

携帯電話に関するトラブルの増加から，携帯電話所持率がほぼ100％に達する高等学校第１学年が，被害者とならないように早急に取り組む必要がある。

②　ホームルーム活動で行う理由

朝や帰りの短時間のホームルーム活動の時間を有効活用することで，情報モラル教育に取り組む機会を広げられると考えた。また，情報モラルの醸成には，コミュニケーション能力の向上が必要ととらえた。コミュニケーション能力については，高等学校学習指導要領第４章特別活動のホームルーム活動の内容に，「コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立」が記載されている。

(2)　研究方法

①　携帯電話に関する短時間活用教材を作成する。

②　研究協力校のホームルーム担任が，朝や帰りのホームルーム活動の限られた時間において，短時間活用教材を利用して情報モラル教育を行い，その教材の正答率及び事前と事後のアンケート結果により変容を検証する。

③　研究協力校２校で，コミュニケーション能力の向上を目指した検証授業を２回ずつ実施し，授業後に生徒が記入する「ふりかえりシート」及び事前と事後のアンケート結果により変容を検証する。

3　研究の実際と考察

(1)　携帯電話に関する短時間活用教材作成

教材は，パソコン設備のある特別な教室以外でもできるようにプリント教材とした。また，内容は携帯電話を利用している生徒が実際に目にしている身近な問題の対処方法を知り，携帯電話利用の誤解を解き，正しい利用方法を示すものとした。さらに，生徒が興味を持って取り組めるようにクイズ形式を用いた。教材は５回分で，「チェーンメール」，「懸賞・占いサイトのわな」，「スパムメール」，「なりすましメール」，「就寝前のメールの影響」とし，１回当たり５分程度で指導できるものとした。

(3) 現象への気付きから論理的な考えに至るまでの学習展開の工夫

① 学習展開の工夫

自然科学における現象解明の過程はア観測(観察，実験)，イ観測（観察，実験）結果の整理・視覚化，ウ共通点・規則性の気付き，エ因果関係の把握，オ現象の類型化と帰納的整理，カ一般化と法則性の発見，キ演繹的な予測の７段階であると考える。また科学的思考はウからキの５段階で現象を思考することであると考える。

その際，ウの段階で共通点や規則性をに気付くことができず，どの部分に着目して比較すればよいか分からなくなり，考察が進まなくなってしまう生徒が見られた。そこで小学校からの学習の系統性を踏まえ，小学校学習指導要領解説理科編（平成19年10月一部補訂）に示されている，問題解決ための能力の重点である比較，要因抽出，多面的視点を「考察のポイント」としてまとめ，学習展開の中で活用した。これらの視点を用いて科学的な思考をすることは小学生だけでなく，中学生においても身に付いていることが必要だからである。その上で，生徒が天気の変化の規則性について一般化したり，天気の予測理由を論理的に説明したりできるような授業を行った。

② 授業での生徒の姿

ア　天気の規則性を見付ける授業

三つの視点においてそれぞれ以下のような生徒の姿が見られた。

○　比較の視点において「お昼ごろは明るい」「温度が上がると，湿度が下がっている」「気圧はそんなに変わらない」のように時間の変化に伴う他の要素の変化について記述をする生徒。

○　要因を探る視点において「夜は太陽が出ていないので，太陽が出るまで，気温が下がり続ける」「気温が上がるのは太陽の日差しによる」のように，空の画像から気温の変化の要因を太陽と結び付ける記述をする生徒。

○　多面的の視点においては，複数の現象を結び付け図で表す生徒。

イ　天気の予測を行わせる授業

図３に示した多面的にとらえる教材の時間軸を１日分にしたものを作製し，班ごとに気象情報を読みとらせ，次の日の天気を予測させた。教材の形式は天気の規則性の学習で用いた教材と同じであるので，抵抗無く読み取りをすることができた。また，これまで学習した天気の変化の規則性を用いて演繹的に解析を行い，論理的に次の日の予測を行うことができた。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

生徒に気象観測を行わせることで，生徒の気象に対する関心が高まるとともに，現象を実感し，科学的にとらえることができた。観測器具が不足している場合は簡易風向計，簡易風力計は自作したものでも十分有効であることが分かった。多面的にとらえることができる教材は，規則性を見付けるための情報が一覧できるので，生徒は気象要素間の関連をとらやすくなり，考察を進める上で有効であった。また，「考察のポイント」を活用する学習展開により，観測結果に対し着目すべき点を見付けることができた。そのことで，現象を論理的に説明したり，考察したりすることができ，科学的思考力が向上した。

今回は天気とその変化の学習の考察を通して科学的思考力の向上を図ったが，今回使用した「考察のポイント」はどの単元においても生かせる内容であるので，今回の天気とその変化の学習以外でも科学的思考力の向上に活用できると考える。

２　課題

生徒に多面的にとらえることができる教材の製作を生徒に行わせることにより，理科に関する関心意欲をさらに向上させることが期待できる。そのために教育課程を工夫して，生徒が行う観測や教材作成とその指導の時間を確保する必要がある。

科学的な用語を正しく用いた表現が十分でない生徒も見られた。今後，視点を利用した考察を繰り返し，科学的な用語を用いた表現ができるよう指導をしていく必要がある。

コンピュータを使った自動計測装置による測定ができない場合は，学校に一番近いアメダスによる観測結果を利用することが考えられる。

(2) **短時間のホームルーム活動で行う情報モラル教育**

研究協力校のホームルーム担任が，短時間活用教材を利用した情報モラル教育を，帰りのホームルーム活動で行った。

(3) **コミュニケーション・トレーニング**

日常のコミュニケーション能力の向上が，文字だけのコミュニケーションによるトラブル発展を防止する効果があると考え，授業実践1「電子掲示板」と授業実践2「コミュニケーションの三つのやり方」を実施した。理解を深めるための疑似体験の活動を行うので，短時間ではなく，50分間のホームルーム活動で行った。

(4) **考察**

生徒は，帰りのホームルーム活動で，短時間活用教材に対して積極的に取り組み，クイズに答えることができた。しかし，研究協力校のホームルーム担任から，10分程度必要だったと指摘があった。5分程度で指導できるように，作成した教材の内容を精選し，文章の記述量を減らすなど再検討する必要がある。

図1と図2は，検証授業実施クラスと検証授業未実施クラスの事前と事後のアンケートを比較したグラフである。誹謗中傷されたときの対処方法と迷惑メールの対処方法について比較した場合，どちらも検証授業実施クラスでは「知らない」という回答が大きく減少しているが，検証授業未実施クラスでは若干増加している。アンケートは夏季休業の前後の6月と9月で実施している。夏季休業中に利用時間が増加したことに伴って，迷惑メールを受け取る機会が増えたことが予測される。

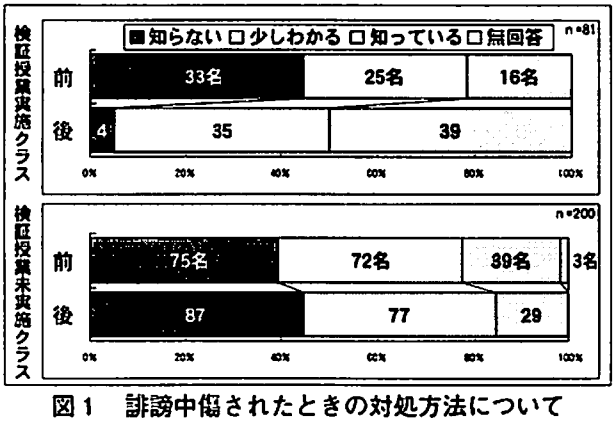

図1　誹謗中傷されたときの対処方法について

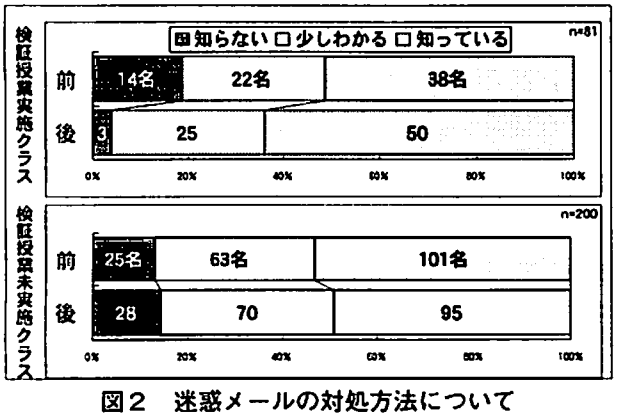

図2　迷惑メールの対処方法について

Ⅲ　研究のまとめ

1　成果

(1) 朝や帰りの限られた時間であるホームルーム活動で，短時間活用教材を利用し情報モラル教育を行うことができた。クイズの正答率の高さやアンケートの結果から，携帯電話に関する問題の対処方法を知り，携帯電話の正しい利用方法を理解することができたと考えられる。

(2) コミュニケーション・トレーニングの授業後，「ふりかえりシート」の記述から，電子掲示板や電子メールでも，よりよいコミュニケーションをしたいという意識の変容が多く確認できた。

(3) 短時間でも情報モラル教育を行うことで，迷惑メールや誹謗中傷書き込みの対処，携帯電話の正しい利用など，情報社会において，適正な活動を行うための考え方や態度を向上させることができたと考えられる。

2　課題

(1) 小学校，中学校段階においても携帯電話所持率が年々増加していることから，携帯電話に関する情報モラル教育が必要である。そのためには，今回作成した短時間活用教材を発達段階に応じた内容に改良することで対応できると思われる。

(2) コミュニケーション・トレーニングの授業を行い，文字だけのコミュニケーションにおいても，よりよいコミュニケーションをしていきたいという意識の変容は確認できたが，コミュニケーション能力が飛躍的に向上したわけではないので，継続的な取組みが必要である。

本研究で利用・作成した教材は，http://www.i-morals.gr.ut.fks.ed.jp/ 参照。